

2021. 10. 17 (日) マタイ27:15~26

27:15 ところで、総督は祭りのたびに、群衆のため彼らが望む囚人を一人釈放することになっていた。

27:16 そのころ、バラバ・イエスという、名の知れた囚人が捕らえられていた。

27:17 それで、人々が集まったとき、ピラトは言った。「おまえたちはだれを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」

27:18 ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことを知っていたのである。

27:19 ピラトが裁判の席に着いているときに、彼の妻が彼のもとに人を遣わして言った。「あの正しい人と関わらないでください。あの人のことで、私は今日、夢でたいへん苦しい目にあいましたから。」

27:20 しかし祭司長たちと長老たちは、バラバの釈放を要求してイエスは殺すよう、群衆を説得した。

27:21 総督は彼らに言った。「おまえたちは二人のうちどちらを釈放してほしいのか。」彼らは言った。「バラバだ。」

27:22 ピラトは彼らに言った。「では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしましょうか。」彼らはみな言った。「十字架につけろ。」

27:23 ピラトは言った。「あの人がどんな悪いことをしたのか。」しかし、彼らはますます激しく叫び続けた。「十字架につけろ。」

27:24 ピラトは、語る事が何の役にも立たず、かえって暴動になりそうなを見て、水を取り、群衆の目の前で手を洗って言った。「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」

27:25 すると、民はみな答えた。「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に。」

27:26 そこでピラトは彼らのためにバラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるために引き渡した。

#### <説教>

今朝も私たちは使徒信条をもって、私たちの主イエス・キリストは「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」た、と信仰の告白をしました。

先主日に続けて、そのポンテオ・ピラトの前でイエスが裁判をお受けになった場面です。

ピラトはイエスに尋問するうちに、イエスにはユダヤ人の祭司長や長老たちが訴えるような死刑に値する罪がないことを確信したようです。

〈ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことを知っていたのである〉(27:18)と書かれているとおりであり、またすぐ後で「あの人がどんな悪いことをしたのか。」(27:23)と言っているとおりです。

しかしピラトは自分の裁判官としての良心に従おうとせず、自分に与えられた権威を正しく用いようとして、公正な裁判を堂々としようとはしませんでした。

彼は〈祭りのたびに、群衆のため彼らが望む囚人を一人釈放することになっていた〉(15)という慣例を利用して、なるべく波風を立てないように、面倒なことにならないようにして早くこの裁判を終わらせようと考えたのでしょう。

その「だし」にされたのが〈バラバ・イエスという、名の知れた囚人〉(16)でした。

彼は〈暴動で人殺しをした暴徒たちとともに牢につながれていた〉者(マルコ 15:7)、  
〈都に起こった暴動と人殺しのかどで、牢に入れられていた者〉(ルカ 23:19)でした。

それで、〈「おまえたちはだれを釈放してほしいのか。バラバ・イエスか、それともキリストと呼ばれているイエスか。」〉(17)と聞かれたら人々は「それならキリストの方を。」と〈彼らが望む〉(15)に違いないとピラトは考えたのでしよう。

加えて(マタイだけが記していることですが)、ピラトの妻からの訴えがありました。

〈ピラトが裁判の席に着いているときに、彼の妻が彼のもとに人を遣わして言った。「あの正しい人と関わらないでください。あの人のことで、私は今日、夢でたいへん苦しい目にあいましたから。」〉(27:19)

〈あの正しい人と関わらないでください。〉、つまり〈キリストと呼ばれているイエス〉の裁判はこれ以上しないですぐに止めてくださいというのでした。

ここでピラトの妻(おそらくピラトと同じ異邦人・異教徒)がキリスト・イエスのことを〈正しい人〉だと正しく見抜いていることは注目する必要があります。

かつてあの東方の博士たちが幼子イエスを「ユダヤ人の王としてお生まれになった方」(2:2)と正しく見抜いたこと、またローマの百人隊長の信仰(8章)、カナン人の女性の信仰(15章)等が思い起こされます。

ユダヤ人とその宗教を代表する祭司長たちや長老たちがピラトに〈ねたみからイエスを引き渡したこと〉を考えると、このピラトの妻の正しい「告白」は、彼女にその意図はなくとも、ユダヤ人の罪を告発するものでもありました。

それにしても、このあとすぐ見るように〈総督〉という「上に立つ権威」、公権力によって不法・不正な判決が下されたこと、それによって〈総督ピラト〉個人としても罪を犯したこと、その責任があることを私たちは決して見逃してはなりません。

さて、この妻の切なる訴えを聞いてピラトはますます〈キリストと呼ばれているイエス〉を早く釈放してこの裁判を早く何とか穏便に終わらせたいと思ったことのでしよう。

〈しかし祭司長たちと長老たちは、バラバの釈放を要求して〉、暴動も人殺しもしていない〈イエスは殺すよう、群衆を説得した〉のです(20)。

彼らは「おまえたちは二人のうちどちらを釈放してほしいのか。」との問いには「バラバだ。」と答え(21)、「では、キリストと呼ばれているイエスを私はどのようにしようか。」には「十字架につける。」と答え(22)、更に「あの人がどんな悪いことをしたのか。」には「十字架につける。」と〈ますます激しく叫び続けた。〉(23)のでした。

こうしてユダヤ人は祭司長たち長老たち、一般群衆に至るまでが「ユダヤ人の王」〈キリストと呼ばれているイエス〉をますます拒み、ますます神に背を向けて行きました。

そして総督ピラトは裁判官としての責任を放棄し、裁判の主導権を祭司長たち長老たち群衆に「引き渡して」しまい、ついには「十字架につける。」と死刑の方法まで人々から指示されるという体たらくでした。

〈ピラトは、語る事が何の役にも立たず、かえって暴動になりそうなを見て〉(24)「これはまずい。かえって面倒なことになりそうだ。ユダヤ人たちに暴動を起こされては自分がローマ皇帝から責任を問われ、自分の地位が危なくなる。それでは自分の面目丸つぶれだ。それだけは絶対に避けたい。」そんなふう考えたのでしよう。

それで「イエスは無罪だ。それが正しい。」と心では思いつつ群衆の「十字架につける」という誤った要求を聞かなければならないが、その責任は回避しなければなりません。

それで、〈水を取り、群衆の目の前で手を洗って言った。「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」〉というパフォーマンスをしました。

これは申命記 21:1-9 で規定されている儀式を真似たもので、要するに「その殺された人の血を流した責任は自分にはない」ことを証言するものでした。

そして申命記ではその殺された人は〈咎のない者〉(21:8,9)とも言われているので、ピラトはここでも自分では意図せずにイエスの無罪をも再び証言したとも言えるでしょう。

それでも、「おまえたちで始末するがよい。」と言って正しい判決を出さずに投げ出し、〈彼らのためにバラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるために引き渡した〉(26)ピラトはそのままでは自分の罪をぬぐい去ることはできません。

同じく、ピラトを通してイエスに罪のないことを何度も示されながら、また〈キリストと呼ばれているイエス〉(17,22)を示されいながら、あくまでも頑なにイエスを拒み続け、「その人の血は私たちや私たちの子どもらの上に。」(25)と言い放ったユダヤ人たちもまたそのままでは自分たちの罪をぬぐい去ることはできません。

後に使徒ペテロは言いました。

「さて兄弟たち。あなたがたが、自分たちの指導者たちと同様に、無知のためにあのような行いをしたことを、私は知っています。しかし神は、すべての預言者たちの口を通してあらかじめ告げておられたこと、すなわち、キリストの受難をこのように実現されました。ですから、悔い改めて神に立ち返りなさい。そうすれば、あなたがたの罪はぬぐい去られます。」(使徒 3:17-19)

私たちが皆ピラトのように保身に走り、群衆のように、更にはペテロのように、人の目を恐れ、周りに流され人を恐れてイエスを否むような罪人です。

ですから、この地上に有る限り〈キリストと呼ばれているイエス〉を信じ、悔い改めて神に立ち返り、キリストによってその罪をぬぐい去られ、赦されなければなりません。